

「一」次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

アメリカの大学で教えていた頃、数学の力では日本人学生にはるかに劣るむこうの学生が、論理的思考については実によく訓練されているので驚かされた。大学生でありながら、(一)×(一)もできない学生が、理路整然とものを言うのである。議論になるとその能力が際立つ。相手の論理的飛躍をアシテキする技術にかけては小憎らしいほど熟練しているし、自らの考えを筋道立てて表現するのも上手だ。

これは学生に限られたことでなく、暗算のうまくてできない店員でも、話してみると驚くほどしっかりした考えを持っていて、スポーツ選手、スター、政治家などのインタビュアーを聞いても、実に当を得たことを明快な論旨で語る。

これと対照的に日本人は、数学では優れているのに論理的思考や表現には概して弱い。日本人学生がアメリカ人学生との議論になって、まるで太刀打ちできずにいる光景は、何度も目にしたことだった。語学的ハンデを差し引いても、なお余りある劣勢ぶりであった。

当時、欧米人が「不可解な日本人」という言葉をよく口にした。不可解なのは日本人の思想でも宗教でも文学でもなく(これらは彼等によく理解されつつあった)、実は論理面の未熟さなのであった。少なくとも私はそう理解していた。科学技術で世界の一流国を作り上げた優秀な日本人が、論理的にものを考えたり表現する、というごく当たり前の知的作業をうまくなし得ないでいること。それが彼等にはとても信じられないことだったのでろう。

日本人が論理的思考や表現を苦手とすることは今日も変わらない。ポーターレス社会が進むなか、阿吽の呼吸とか腹芸は外国人に通じないから、どうしても「論理」を育てる必要がある。いつまでも「不可解」という婉曲な非難に①甘んじているわけにはいかないし、このままでは外交交渉などでは大きく国益をc擱なうことになる。

数学を学んでも「論理」が育たないのは、②数学の論理が現実世界の論理と甚だしく違うからである。数学における論理は真(正当性一〇〇パーセント)か、偽(正当性〇パーセント)の二つしかない。真白か真黒かの世界である。現実世界には、(A)的な真も(A)的な偽も存在しない。すべては灰色である。殺人でさえ③真黒ではない。死刑がある。殺人は真黒に限りなく近い灰色である。

そのうえ、数学には公理という万人共通の規約があり、そこからすべての議論は出発する。現実世界には公理はない。すべての人間がそれぞれの公理を用いていると言つてよい。

現実世界の「論理」とは、普遍性のないdゼンテイから出発し、灰色の道をたどる、というきわめて頼りないものである。そこでは思考の正当性より④説得力のある表現が重要である。すなわち、「論理」を育てるには、数学より筋道を立てて表現する技術の修得が大切ということになる。

これは国語を通して学ぶのがよい。物事を主張させることである。書いて主張させたり、討論で主張させることもつとも効果的であろう。筋道を立てないと他人を説得できないから、自然に「論理」が身につく。読書により豊富な語彙を得たり適切な表現を学ぶことも、説得力を高めるうえで必要である。

問一 波線部aとdについて、カタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えよ。

問二 傍線部①の「甘んじ」について、それと最も意味が近いものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号で答えよ。

- ア 受容 イ 応戦 ウ 受諾 エ 調節

問三 傍線部②では「数学の論理が現実世界の論理と甚だしく違う」と言っているが、その「違」いはどのようなものか。本文中の言葉を用いて六十字以内で答えよ。

問四 二か所の空欄Aには、共通の語が入る。その語を次のア～エの中から一つ選び、その記号で答えよ。

- ア 具体 イ 抽象 ウ 絶対 エ 相対

問五 傍線部③の「真黒ではない」について、その言い換えになるように、解答欄の空欄を本文中の十字以内の語句で埋めよ。

問六 傍線部④の「説得力のある」について、それを本文中の語句を用いて十字以内で言い換えよ。

【2】 次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

学校がひけると、そこから少し歩いたところにある区立図書館へ行く。そのなかに、未整理の古い書庫があり、開架式になっていた。

窓の少ない重苦しい部屋である。長いあいだ開かれることのない本の頁が、しつとりとはりついている感触がわかる。棚のあいだは暗く細い通路。そこをゆつくりと歩いていく。学校や家やどんな道を歩くときも、私はこんなテンポで歩かない。でも、この速度でなければ、めぐりあえない本がある。そんな気がして、歩くのである。

同級生の増田さんが校内誌に発表した詩とまったく同じ詩を、ある書物のなかに偶然見つけたのも、この書庫のなかであった。

増田さんは、目や鼻が大きく、外国人のような風貌だ。①いつの日だったか、彼女が、私の靴からノートを勝手に取り出して盗み読んでいる姿を見つけたことがある。あのときは心がふるえた。時間をおいてから教室に戻ると、私の靴は何もなかったかのように配置されていて、それ以来、彼女とはaキヨリを置くようになっていた。そんな増田さんが詩を書いていることを、知らなかった。私もまた、詩に惹かれていたが、うまく書くことはできなかった。詩を書く者同士は、このようにしてなかなか出会えない。出会うのは常に一篇の詩と一人の読者である。

彼女の名で校内誌に発表された作品は、神秘的な不思議の美しい詩だった。へえ、あの増田さんが、とい

う印象を持ったものの、詩のことばは、その輝き以外の尺度を、たちまち払いのけた。嫉妬しよとという感情も生まれず、私はひたすらその詩を羨望せんぼうするだけだった。

そして、というか、しかし、というか、偶然見つけた本の方には、増田さんの名はなく、岸田しだ鈴子すずこという詩人の名があった。タイトルは「忘れた秋」。題名までもが同一だった。

②黒い小石が、素早く心のなかを落ちていった。しかし私は、知り得たことを誰にも言わなかった。なぜ言わなかったのだろう。そうすることが、正しいことであると思っただけではない。そんなときは、黙っているのが一番であるという判断でもなく、詩だけを称ほえていればいいのだという気持ちでもなかった。道徳や常識、知恵などとは一切無関係に、あのとときの私は、ただ、黙っていた。

何ものにも強制されず、ただ自分の③肉声に従うこと。それが、光の差し込まぬ王国——古い書庫——の、目に見えぬ主と交わした約束だったのだろうか。公の場所ではなく、私の心という小さな場所で、そのとき増田さんは何者かに裁さがれ、瞬間にして許された。一篇の詩と自分の身を、同一に重ねたいと願う心——少しの揺れで、dサクゴの方に傾いてもしまうその心は、私自身の心でもあった。そして④それこそが、私が黙っていた理由ではなかったか。

同じ詩に惹かれた者どうし、私たちは、誰にも見えないかたちで、あとき誰かに出会い、そして今も、心のどこかで繋がっているような気がするのである。

問一 波線部 a、d について、カタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えよ。

問二 傍線部①の「いつの日だったか、彼女が、私の鞆からノートを勝手に取り出して盗み読んでいる姿を見てしまったことがある」について、筆者は、何のためにこの話題を紹介したと考えられるか。適当と考えられるものを、次のア、イ、ウの中から二つ選び、その記号で答えよ。

- ア 作者の心を震え上がらせた事件を紹介することによって、二人の関係の底に恐怖感が発生したことを伝えようとしている。
- イ 親友に裏切られた事件を紹介することによって、その後互いの関係が疎遠になったことを理解しやすくしている。
- ウ 一見すると何があったかわからないほどの後始末の徹底ぶりを紹介することによって、詩作にも通じる、「増田さん」の手際の良さを印象づけている。
- エ 友人の性格の一端を知った経験を紹介することによって、それ以後、二人が本当の親友になれたことを印象づけようとしている。
- オ 他者の世界を犯す行為を紹介することによって、それと似た他の行為の紹介が説得力を持つようになっている。

問三 傍線部②の「黒い小石が、素早く心のなかを落ちていった」について、それはどのようなことの比喻表現か。二十五字以内でわかりやすく答えよ。

問四 傍線部③の「肉声」について、それはどのような内容の声か。解答欄の形式に合うように、十字以内で解答せよ。

問五 傍線部④の「それ」について、それが指し示す具体的な内容を考え、五十字以内でわかりやすく答えよ。

問六 本文の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選びその記号で答えよ。

- ア 区立図書館を訪れた筆者は、「増田さん」も同じ場所で岸田稔子の詩に出会ったと確信することができた。
- イ 私は、面倒に巻き込まれるのがいやだと思い、区立図書館で知り得たことを誰にも言わないことにした。
- ウ 区立図書館で偶然に詩に出会った瞬間、私の心に、盗作をしたいという暗く衝動的な気持ちが発生した。
- エ 増田さんが詩を書く人だということを私がよく知らないうちに、友情は二人の間に成り立たなくなってしまった。

【三】次の古文を読んで、後の各問いに答えなさい。

ある時、**狼**、咽喉のどに大きな骨を立てて、難義がたぎに及びける折節、**鶴**、この由よしを見て、「**御辺**は、何を悲し

給ふぞ」といふ。①**狼**、泣く泣く申しけるは、我が咽喉のどに、大きな骨を立てり。これをば、御辺ごへんならでは救ひ給

ふ人なし。ひたすら頼み奉たよまうるといひければ、**鶴**、件の口くちばしを伸べ、狼の口をあけさせ、骨を唾くわへて、「え

いや」と引き出す。

その時、**鶴**、狼に申しけるは、「今より後、この②**報恩**によつて、親しく申し語るべし」といひければ、**狼**、怒いか

つていふ様、③**何条**、汝なんじょうが何程の恩を見せけるぞや。汝が首、ふつと食いきらんと、今其まがしが心にありしを、

助け置くこそ、汝がためには④**報恩**なり」といひければ、⑤**鶴**、力に及ばず立去りぬ。

その如く、⑤**悪人**に対して、能き事を教ゆといへども、かへつてその罪をなせり。しかりといへども、人に對

して、能き事を教へん時は、天道に對し奉りて、御奉公と思ふべし。

問一 傍線部①について、このとき「狼」が「申し」た直接の発言内容は、どこからどこまでになるか。始めと終わりの二文字ずつを答えよ。

問二 この話の中で、「狼」は「鶴」に対してどのような頼みごとをしたのか。また、なぜ、鶴に頼んだのか。それぞれ三十文字以内で説明せよ。

問三 傍線部②、③の「報恩」について、「狼」と「鶴」が、互いに相手に対して施した「恩」として考えている内容を、それぞれ三十文字以内で記せ。

問四 傍線部④「鶴、力に及ばず立去りぬ」とありますが、このときの「鶴」の心を推し量ったものとして適当ではないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号で答えよ。

ア 狼のあまりに身勝手な言い分にあきれ果てている。

イ 狼の言うことに納得し、感謝の思いを深めている。

ウ 聞く耳を持たない者と議論をしても無駄だと思っている。

エ せっかくの親切を無にするような態度を不快に思っている。

問五 傍線部⑤「悪人」とは、本文中ではだれのことか。適当な語を抜き出せ。

問六 次の1～5の各ことわざの空欄「1」～「5」にあてはまる適当な漢字を、あとのア～オの中から一つずつ選び、その記号で答えよ。

1 苦しい時の「1」頼み 2 溺れるものは「2」をもつかむ 3 「3」元過ぎれば熱さを忘れる

4 後足で「4」を掛ける 5 恩を「5」で返す

ア 仇あだ イ 神 ウ 砂 エ 喉のど オ 薬いす